浅谈辽西地区前燕、后燕政权中的外族居民

郑　宇　　刘发力　　李　霞

前燕、后燕为十六国时期东北及华北地区的两个向后承替的少数民族政权，建立者均为慕容鲜卑。

鲜卑是我国古代东北地区的一支东胡系少数民族，有关鲜卑的记载最早见于《后汉书》。1世纪末，北方的匈奴统治集团分裂为南北两部分，势力衰弱之际，鲜卑乘机南下，势力强盛，“南抄表缘边，北拒丁零，东却夫余，西击乌孙，尽据匈奴故地，东西万余里，南北七千余里(《后汉书·鲜卑传》)”。

曹魏初年，慕容鲜卑部的莫护跋率部进入辽西，289年，慕容廆迁回大凌河流域，294年，居棘城。337年，廆子皝称燕王，都棘城，建立政权，史称前燕。370年，前秦苻坚破燕都邺城，前燕灭亡。384年，慕容垂在龙城称尊号，是为后燕。后燕凡26年，409年，后燕高云为近侍所弑，鲜卑化的汉人冯跋继承后燕，建立北燕。

前燕、后燕政权的主体为慕容鲜卑，但在其统治下，还有众多汉族、鲜卑宇文部、段部、高句丽、百济、夫余、丁零人等。

1．前燕、后燕政权的疆域及其主体居民的民族

前燕政权的统治中心在辽西地区，前燕初建都于棘城，即今之朝阳市[1]。341年，慕容皝迁都龙城[2]，此后慕容鲜卑的势力继续向中原地区发展。东晋永和五年(349)徙都于蓟，后又迁邺，建留台于龙城[3]。东晋太和五年(370)为前秦所灭。淝水之战(383)后，前燕贵族慕容垂趁机建立后燕政权，以龙城为都。一直到北燕灭亡，龙城都是后燕与北燕的统治中心。

前燕的疆域范围最初为辽西地区，后随着慕容氏不断征战开疆拓土，势力最鼎盛时其疆域包括今辽宁省大部分地区、河北、河南东部、山东、及安徽的一部分[4]，鼎盛之时，疆土“南至汝、颍，东尽青、齐，西抵崤、黾，北守云中”[5]。此后的后燕政权所辖疆域未超过前燕时期，只包括了辽东、辽西、和幽州地区[6]。

幽州及其以南地区的居民族属以汉族为主。西晋时期，幽州下辖七个县，共五万九千二十户[7]。辽东地区统八县，共五千四百户[8]。这些居民多为汉族人。3世纪末，慕容鲜卑迁入辽西，改变了辽西地区居民的民族构成，辽西地区统三县，共二千八百户[9]，这些居民应以汉族和慕容鲜卑为主体。

2．前燕、后燕时期迁入辽西的居民族属

前、后燕政权的疆域，其北接夫余，东临高句丽，南濒东晋，西为代、鲜卑宇文部等。前、后燕政权与这些相邻的民族、政权之间交往频繁，导致大量的人口迁徙。因此，辽西地区作为前、后燕政权的政治中心拥有大量的外族居民。

慕容鲜卑是前燕、后燕政权的建立者，曹魏初年，莫护跋率部进入辽西，从司马懿讨公孙渊，拜率义王[10]，从此，慕容鲜卑便开始掌控辽西地区。

汉族是辽西地区居民的主要族属，早在慕容鲜卑进入辽西地区之前，这里的居民有一万四千一百五十户[11] 东汉时期辽西作为郡制下辖五城，地理范围大于西晋时期[12]。而除此之外，在前燕、后燕时期，辽西地区还迁入了很多外来的汉族人口。如西晋建兴元年(313)，“辽东张统据乐浪、带方二郡，与高句丽王乙弗利相攻，连年不解，乐浪王遵说统帅其民千余家归廆”[13]。乐浪、带方二郡多为汉人，而张统本人为辽东人氏。西晋永嘉之乱后，中原士庶很多流亡辽西，而慕容廆则多加招揽以为己用，并且立州郡安置这些中原流民[14]。以至于“自永嘉丧乱，百姓流亡，中原萧条，千里无烟，饥寒流陨，相继沟壑。先王以神武圣略，保全一方，威以殄奸，德以怀远，故九州之人，塞表殊类，襁负万里，若赤子之归慈父，流人之多旧土十倍有余”[15]。咸和九年(334)，“皝自征辽东，克襄平。仁所署居就令刘程以城降，新昌人张衡执县宰以降。于是斩仁所置守宰，分徙辽东大姓于棘城”[16]。咸康年间，慕容皝两次与石季龙交战，掠后赵人口数万(见附表)。

宇文鲜卑与慕容鲜卑毗邻，二部之间战事频繁，通过战争人口流动增量大。慕容廆时期，曾经两次破宇文鲜卑，迁徙宇文鲜卑数万人到辽西地区(见附表)。慕容鲜卑周边的其他鲜卑诸部，如段部、素连部、木津部都曾因战争，其族人被掠入辽西(见附表)。

高句丽西接鲜卑，二者之间亦是征战不断，前燕慕容皝、后燕慕容盛两次掠高句丽人口万余户(见附表)。

夫余在前燕时期也因战争有大量人口被掠至辽西，甚至还有夫余人通过辽西被卖到中原地区[17]。

以上这些民族曾经过大规模的人口迁徙，此外，还有其他民族也有少量的人口迁入辽西地区。太宁三年(325)，慕容廆伐石季龙时，“以裴嶷为右部都督，率索头为右翼……”[18]“索头”又称“索头鲜卑”，魏晋南北朝时汉族士人称拓跋鲜卑为索头。因此，慕容鲜卑治下应有效力于前燕的拓跋鲜卑人。

太元二十年(395)，慕容详僭号，赵王麟起兵讨伐，“麟率丁零之众入中山，斩详及其亲党三百余人”，说明后燕时期，慕容鲜卑治下还有丁零人。

3．前燕、后燕时期外来居民的迁徙途径

前燕、后燕时期外来居民的迁徙途径主要有三种：主动归附、战争掠夺、人质。

① 主动归附

十六国时期，战争频繁，中原地区由于政权变更快，战乱更胜过周边地区，尤其是西晋永嘉之乱(311)后，大量中原人涌向辽西地区。“时二京倾覆，幽冀沦陷，廆刑政修明，虚怀引纳，流亡士庶多襁负归之”。这些人多为汉族人，归附的原因为避难辽西。

那些主动归附的汉族士庶在慕容鲜卑治下拥有较高的地位，在当时人眼中，他们的身份便与通过其他方式进入辽西的外族人不同，慕容皝时期大臣的上表中曾有言：“句丽、百济及宇文、段部之人，皆兵势所徙，非如中国慕义而至，咸有思归之心。”[19] 由此可见，鲜卑统治者对不同外来民族的态度有所不同。

汉族士庶最大规模的一次迁入是中原永嘉之乱后。慕容氏也很重用这批汉族士庶，他们中的很多人在前燕为官，并且深得慕容廆、慕容皝重视，在前燕的汉化中起到相当大的作用。“(慕容廆)以河东裴嶷、代郡鲁昌、北平阳耽为谋主，北海逢羡、广平游邃、北平西方虔、渤海封抽、西河宋奭、河东裴开为股肱，渤海封弈、平原宋该、安定皇甫岌、兰陵缪恺以文章才俊任居枢要，会稽朱左车、太山胡毋翼、鲁国孔纂以旧德清重引为宾友，平原刘儒学该通，引为东庠祭酒，其世子皝率国胄束修受业焉。廆览政之暇，亲临听之，于是路有颂声，礼让兴矣。”[20] 这些汉族人在前燕政权建设、巩固，及慕容鲜卑汉化的过程中，起到极大的推进作用。

② 战争掠夺

战争掠夺是前后燕政权获取外来人口最多的一种方式。辽西地处交通要道，前、后燕政权与周边政权及民族战争不断，胜利的一方通常会掠夺败方的居民。

前、后燕政权掠夺人口族属主要有鲜卑各部、夫余、高句丽及来自不同地方的汉族人，可能还包括一些后赵的羯人。这些被掠夺而来的人口，大概有二十余万户(见附表)。

通过战争掠夺获取人口，大多发生在前燕早期，即慕容廆和慕容皝时期，此外，慕容暐、慕容盛时期各发生一次。慕容廆是前燕第一代统治者，慕容皝是第一个称尊的燕王，他们二人统治时期慕容鲜卑势力不断扩大，在这个过程中他们不断掠劫人口，充实自身的同时也打击了敌人，巩固统治。其中，规模较大的几次均发生在慕容皝时期，如咸和九年(334)，迁徙辽东大户至棘城；咸康七年(341)，慕容皝征高句丽，破其都城丸都城，劫掠丸都城人口五万余而归；永和三年(347)，征夫余，掠夫余人口五万而归。

这些战争掠夺而来的人，大多被安置在当时的都城附近，即前期的辽西(棘城、龙城)，后期的河北地区(蓟城、邺城)。亦有为之增设的新郡，如咸和九年(334)，慕容皝迁徙辽东大户至棘城，“置和阳、武次、西乐三县”[21]。

③　人质

人质也是前、后燕时期外族人口迁入的一种方式。史籍中没有明确记载过三燕时期都有哪些政权的人质迁入过，《十六国春秋》和《晋书》都曾记载前秦拔邺城时，有夫余、高句丽和上党的质民子弟引纳前秦军队的情况[22]，这说明三燕治下有一定数量的来自不同民族或政权的质民。

总之，前、后燕时期，通过不同的方式，吸收了很多外来人口，这些来自不同民族的居民加快了慕容鲜卑的汉化过程，也为辽西地区的开发做出了贡献。

注

[1] 田立坤：《棘城新考》，《辽海文物学刊》，1996年2期。

[2] 汤球：《十六国春秋辑补·前燕录三·慕容皝下》卷二十五（中华书局，1985年），《晋书·慕容皝载记》卷一百九："咸康七年，皝迁都龙城"。

[3]《晋书·慕容儁载记》

[4] 谭其骧：《中国历史地图集》第三集，中国地图出版社，1991年。

[5] 顾祖禹：《读史方舆纪要》卷十，中华书局，2005年。

[6] 同上

[7]《晋书·地理志上》，中华书局，1974年。

[8] 同上

[9] 同注［7］。

[10]《晋书·慕容廆载记》："父涉归，以全柳城之功，进拜鲜卑单于，迁邑于辽东北，于是渐慕诸夏之风矣。"

[11]《后汉书·郡国志五》，中华书局，1973年。

[12] 同注［4］。

[13]《资治通鉴》卷八十八，中华书局，1956年。

[14]《晋书·慕容廆载记》："时二京倾覆，幽冀沦陷，廆刑政修明，虚怀引纳，流亡士庶多襁负归之。廆乃立郡以统流人，冀州人为冀阳郡，豫州人为成周郡，青州人为营丘郡，并州人为唐国郡。"

[15]《晋书·慕容皝载记》，中华书局，1974年。

[16] 同注［15］。

[17]《晋书·东夷传·夫余国》"尔后每为廆掠其种人，卖于中国"。

[18] 同注［15］。

[19] 同注［15］。

[20] 同注［15］。

[21] 同注［15］。

[22] 崔鸿：《十六国春秋》："散骑侍郎徐蔚等率夫余、高句丽及上党质民子弟五百夜开城门，引纳秦师。

附表　前燕、后燕时期战争掠夺人口统计

时间	迁徙居民的族属	迁徙人数	出处
太康六年(285)	夫余	万余人	《晋书·慕容廆载记》“又率众东伐扶余，扶余王依虑自杀，廆夷其国城，驱万余人而归”
太安元年(302)	鲜卑宇文部	万余人	《资治通鉴》卷八十四“(廆）大破之（素怒延)，追奔百里，俘斩万计”
永康元年(300)	鲜卑素连部、木津部		《晋书·慕容廆载记》“(廆）率骑讨连、津，大败斩之，二部悉降，徙之棘城，立辽东郡而归”
太宁三年(325)	鲜卑宇文部	数万余户	《晋书·慕容廆载记》“廆遣皝距之。以裴嶷为右部都督，率索头为右翼，命其少子仁自平郭趣柏林为左翼，攻乞得龟，克之，悉虏其众。乘胜拔其国城，收其资用亿计，徙其人数万户以归。”
永昌元年(322)	鲜卑段部	千余户	《资治通鉴》卷九十二“慕容廆遣其世子皝袭段末柸，入令支，掠其居民千余家而还”
咸和九年(334)	辽东汉族		《晋书·慕容皝载记》“皝自征辽东，克襄平。仁所署居就令刘程以城降，新昌人张衡执县宰以降。于是斩仁所置守宰，分徙辽东大姓于棘城，置和阳、武次、西乐三县而归。”
咸康年间	后赵	千余户	《晋书·慕容皝载记》“皝前军帅慕容评败季龙将石成等于辽西，斩其将呼延晃、张支，掠千余户以归。段辽谋叛，皝诛之。”
咸康六年(340)	后赵	三万户	《晋书·慕容皝载记》皝将图石氏，从容谓诸将曰：“石季龙自以安乐诸城守防严重，城之南北必不设备，今若诡路出其不意，冀之北土尽可破也。”于是率骑二万出蠮螉塞，长驱至于蓟城，进渡武遂津，入于高阳，所过焚烧积聚，掠徙幽、冀三万余户。
咸康七年(341)	高句丽	五万余口	《晋书·慕容皝载记》“皝掘钊父利墓，载其尸并其母妻珍宝，掠男女五万余口，焚其宫室，毁丸都而归。”
永和三年(347)	夫余	五万余口	《晋书·慕容皝载记》“遣其世子儁与恪率骑万七千东袭夫余，克之，虏其王及部众五万余口以还。”
兴宁元年(363)	汝南地区汉族	万余户	《晋书·慕容暐载记》“暐复使慕容评寇许昌、悬瓠、陈城，并陷之，遂略汝南诸郡，徙万余户于幽冀。”
隆安四年(400)	高句丽	五千余户	《晋书·慕容盛载记》“盛率众三万伐高句骊，袭其新城、南苏，皆克之，散其积聚，徙其五千余户于辽西。”

遼西地区における前燕・後燕政権下の外来居住者について

鄭　宇　　劉発力　　李　霞

前燕・後燕は、十六国期の東北および華北地区に前後して興った少数民族政権で、慕容鮮卑によって建国された。

鮮卑は中国古代東北部にいた東胡系少数民族のひとつである。鮮卑に関するもっとも古い記事は『後漢書』にみえる。紀元１世紀末に北方の匈奴統治集団は南北に分裂するが、鮮卑は勢いに乗って南下し勢力を強めたと考えられ、「南鈔縁辺、北拒丁零、東却夫余、南撃烏孫、尽据匈奴故地、東西万余里、南北七千余里」（『後漢書・鮮卑伝』）とある。

曹魏初年に慕容鮮卑部族の莫護跋は、部を率いて遼西に入った。紀元289年に慕容廆は大凌河流域へと移り、294年に棘城に居した。そして337年、廆の子・皝は燕王を称し、棘城を都として政権を立てた。史書では前燕と称される。370年に前秦の苻堅は燕の都・鄴城を破り、前燕は滅亡した。384年、慕容垂は龍城において尊号を称し後燕を建てた。後燕はおおよそ26年続くが、後燕の高雲が近侍によって殺され、409年、鮮卑化した漢人が後燕を継承し北燕を建てた。

三燕政権は慕容鮮卑を主体とするが、三燕政権の治下には多数の漢族や鮮卑宇文部、段部、高句麗、百済、夫余、丁零人などがいた。

１．前燕・後燕政権の境域およびそこに居住した主要民族

前燕政権の中心地は遼西地区にあり、前燕は当初、棘城を都とした。棘城は現在の朝陽市である[(1)]。341年、慕容皝は龍城に遷都した[(2)]。こののち、慕容鮮卑は中原地区に向かって勢力をのばし、東晋永和五年（349）には都を薊、つづいて鄴へ遷したが、龍城にも都の機能をとどめていた[(3)]。東晋太和五年（370）には前秦によって滅ぼされる。淝水の戦い（383）ののち、前燕の貴族・慕容垂は機に乗じて後燕政権を立て、龍城を都とした。北燕滅亡にいたるまで、龍城は後燕と北燕の統治の中心であった。

前燕の境域ははじめ遼西地区にあったが、のちの慕容氏による再三にわたる戦いと境域開拓、領土拡大により、最盛期には現在の遼寧省の大部分、河北省、河南省東部、山東省、安徽省の一部をその境域に含んだ[(4)]。その最盛期の境域は、「南至汝・潁、東尽青・斉、西抵崤・黽、北守雲中[(5)]」とされる。のちの後燕および北燕政権が治めた境域はいずれも前燕期を超えるものではなく、遼東、遼西、幽州地区のみを含む小規模な範囲のものであった[(6)]。

幽州およびそれ以南に住む主な民族は漢族であった。西晋期、幽州は七つの県を統轄しており、その戸数は59,020戸であった[7]。遼東地区は八県を統轄し、その戸数は5,400戸であった[8]。これらの多くは漢人である。3世紀末、慕容鮮卑は遼西に遷り、遼西地区の民族構成を変化させた。遼西地区は三県を統轄し、2,800戸となり[9]、これら居住民はおそらく漢族と慕容鮮卑が主体であったと考えられる。

2．前燕・後燕期に遼西へ移民した族属の種類

前燕・後燕政権の版図は、北は夫余に接し、東は高句麗、南は東晋、西は代や鮮卑宇文部などに臨んでいた。三燕政権とこれら隣する民族、政権間の往来は頻繁で、大量の人口移動を招いた。そのため、遼西地区は三燕政権の政治的中心地として多くの外来居住者を擁した。

慕容鮮卑は三燕政権の創立者である。曹魏初年に慕容鮮卑部の莫護跋が部を率いて遼西に入り、司馬懿に従って公孫淵を討ち、率義王を拝命した[10]。これより、慕容鮮卑は遼西地区を統治するようになった。

漢族は遼西地区に居住していた主要民族で、慕容鮮卑が遼西地区に入るよりも早く、当地には14,150戸の人びとがいた[11]（後漢期の遼西は郡制のもとで五城を統轄し、その地理的範囲は西晋期よりも大きかった[12]）。このほか、三燕時期において遼西地区には外地から多数の漢族の移動があった。例えば、西晋建興元年（313）には「遼東張統据楽浪、帯方二郡、與高句麗王乙弗利相攻、連年不解、楽浪王遵説統帥其民千余家帰廆[13]。」とある。楽浪、帯方の二郡の多くは漢人であり、張統本人も遼東人氏である。西晋の永嘉の乱後には多くの中原士庶が遼西に亡命した。また、慕容廆は多くを招き入れ、州郡を立ててこれらの中原移民を置いた[14]。それは「自永嘉喪乱、百姓流亡、中原蕭条、千里無煙、飢寒流隕、相継溝壑。先王以神武聖略、保全一方、威以殄姦、徳以懐遠、故九州之人、塞表殊類、襁負万里、若赤子之帰慈父、流人之多旧土十倍有余[15]。」という状況であった。咸和九年（334）には「皝自征遼東、克襄平。仁所署居就令劉程以城降、新昌人張衡執県宰以降。於是斬仁所置守宰、分徙遼東大姓于棘城[16]」とある。咸康年間、慕容皝は二度にわたり石季龍と戦い、後趙の人口数万を奪った（付表参照）。

宇文鮮卑と慕容鮮卑は隣接し、両部間の戦事は頻繁で、戦乱による人口の流動も増加した。慕容廆期には宇文鮮卑を二度破り、宇文鮮卑数万人が遼西地区に移った（付表参照）。

慕容鮮卑周辺の段部・素連部・木津部といったその他の鮮卑諸部も、戦乱によってその民が遼西に掠奪された（付表参照）。

高句麗は鮮卑の西に接し、両者間においても戦事が絶えず、前燕の慕容皝と後燕の慕容盛は二度にわたり高句麗の民数万余戸を奪っている（付表参照）。

夫余も前燕期の戦乱によって大量の人口が遼西に奪われ、遼西を通じて中原地区へと売られる夫余人さえもあった[17]。

以上の民族は大規模な人口移動を経験しているが、その他の民族も人口は多くはないが、遼西地区へと移っている。太寧三年（325）、慕容廆が石季龍を討伐した際には「以裴嶷為右部都督、率索頭為右翼…[18]」とあり、「索頭」や「索頭鮮卑」と称されている。魏晋南北朝時期の漢族士人は拓跋鮮卑を索頭と称した。このことから、慕容鮮卑の統治は前燕の拓跋鮮卑人にも効力を有していたと考えられる。

太元二十年（395）、慕容詳は僭号し、趙王・麟が兵を起こして討伐した。「麟率丁零之衆入中山、斬詳及其親党三百余人」という記事より、後燕期の慕容鮮卑の治下には丁零人もいたことがわかる。

3．前燕・後燕期の外来居住者の移民方法

前燕・後燕期における外来住民の移民方法には、主に自発的な帰順、戦乱による掠奪、人質の三種があった。

①　自発的帰順

十六国期には戦乱が頻発した。中原地区では政権が即時に交代し、戦乱は周辺地区を圧倒するものであった。とりわけ西晋永嘉の乱（311年）後、大量の中原人が遼西地区に押し寄せた。「時二京傾覆、幽冀淪陥、廆刑政修明、虚懐引納、流亡士庶多襁負帰之」。彼らの多くは漢族で、帰順の理由は遼西への避難であった。

このように自発的に帰順した漢族士庶は、慕容鮮卑の統治下において高い地位を有した。当時の人々の目には、彼らの身分はそのほかの方法で遼西に入った外来民族とは異なって映り、慕容皝期の大臣の上表中には「句麗、百済及宇文、段部之人、皆兵勢所徙、非如中国慕義而至、咸有思帰之心。[19]」とある。このことから、鮮卑の統治者は民族ごとに異なる態度をとっていたことがわかる。

最大規模の移民は永嘉の乱後のもので、慕容氏もこの時移住してきた漢族士人を重用した。彼らの多くは前燕の官人となり、しかも慕容廆や慕容皝から大変重視され、前燕の漢化に多大な影響をおよぼした。史籍にも、「（慕容廆）以河東裴嶷、代郡魯昌、北平陽耽為謀主、北海逢羡、広平遊邃、北平西方虔、渤海封抽、西河宋奭、河東裴開為股肱、渤海封弈、平原宋該、安定皇甫岌、蘭陵繆恺以文章才俊任居枢要、会稽朱左車、太山胡母翼、魯国孔纂以旧徳清重引為賓友、平原劉讃儒学該通、引為東庠祭酒、其世子皝率国胄束修受業焉。廆覧政之暇、親臨聴之、于是路有頌声、礼譲興矣[20]」と記されている。これらの漢族は前燕政権の樹立と安定化の基盤となるとともに、慕容鮮卑の漢化過程において大きな促進作用をもたらした。

②　戦乱による掠奪

戦乱による掠奪は、前燕・後燕政権が外来人口を得るうえでもっとも多く用いた手段であった。遼西の地は交通の要所であったため、前燕・後燕政権と周辺政権・民族間には争いが絶えなかった。通常、勝者は敗者の民を奪った。

前燕・後燕政権が掠奪した族属には、主として鮮卑各部、夫余、高句麗および各地の漢族、そのほか後趙の羯人も含まれていた可能性がある。これらの掠奪人口はおおよそ20余万戸であった（付表参照）。

戦乱による人口の掠奪の多くは前燕早期、すなわち慕容廆と慕容皝の時期によるもので、これ以外は慕容暐と慕容盛の時期に各一度生じたのみである。慕容廆は前燕の第一代統治者、慕容皝は燕王を称した最初の人物であり、彼ら二人の時期に慕容鮮卑勢力は絶えず拡大していた。その過程で彼らは絶えず人口を奪い、自身を充実させると同時に敵に打撃を与え、統治を強固にした。そのうち、幾度かの比較的大規模なものはすべて慕容皝期に起きており、咸和九年（334）の遼東大戸の棘城への移動や、咸康七年（341）の慕容皝による高句麗攻略時、その都・丸都城を破り、丸都城の人口５万余口の掠奪、永和三年（347）に夫余を攻め、夫余人口５万余口の掠奪などが挙げられる。

このような戦乱によって略奪されてきた人口の多くは、当時の都城付近、すなわち前期の遼西（棘城、龍城）、後期の河北地区（薊城、鄴城）に置かれたが、そのために新都を増設することもあった。例えば、咸和九年（334）に慕容皝が遼東大戸を棘城へ移した際には「置和陽、武次、西楽三県[21]」と記されている。

③　人質

人質も前燕・後燕期に外来の族属が移り入る方法であった。史籍中に前燕・後燕政権が人質を移入させたという明確な記述はないものの、『十六国春秋』と『晋書』には、前秦が鄴城を奪取した際、夫余、高句麗、上党の質民子弟を前秦軍が招き受けた状況が記されている[22]。このことは、三燕の治下に出自の異なる民族や政権の人質が一定数いたことを示している。

以上のことをまとめると、前燕・後燕期には、異なる方法を通じてその政権中に多くの外来人口を擁しており、これら異なる出自をもつ民族は慕容鮮卑の漢族化を促すとともに、遼西地区の開発にも貢献したと考えられる。

註

（１）田立坤「棘城新考」『遼海文物学刊』1996年第２期。

（２）湯球『十六国春秋輯补・前燕録三・慕容皝下』巻二十五、中華書局、1985年。
『晋書・慕容皝載記』巻一百九「咸康七年、皝遷都龍城。」

（3）『晋書・慕容儁載記』
（4）譚其驤『中国歴史地図集』第3集、中国地図出版社、1991年。
（5）顧祖禹『読史方輿紀要』巻十、中華書局、2005年。
（6）同註（5）。
（7）『晋書・地理志上』中華書局、1974年。
（8）同註（7）。
（9）同註（7）。
(10)『晋書・慕容皝載記』「父渉帰、以全柳城之功、進拝鮮卑単于、遷邑於遼東北、於是漸慕諸夏之風矣。」
(11)『後漢書・郡国志五』中華書局、1973年。
(12) 同註（4）。
(13)『資治通鑑』巻八十八、中華書局、1956年。
(14)『晋書・慕容廆載記』「時二京傾覆、幽冀淪陥、廆刑政修明、虚懐引納、流亡士庶多襁負帰之。廆乃立郡以統流人、冀州人為冀陽郡、豫州人為成周郡、青州人為営丘郡、并州人為唐国郡。」
(15)『晋書・慕容皝載記』中華書局、1974年。
(16) 同註（15）。
(17)『晋書・東夷伝・夫余国』「爾後毎為廆掠其種人、売於中国」
(18) 同註（15）。
(19) 同註（15）。
(20) 同註（15）。
(21) 同註（15）。
(22) 崔鴻『十六国春秋』「散騎侍郎徐蔚等率夫余、高句麗及上党質民子弟五百夜開城門、引納秦師。」

付表　前燕・後燕時期の戦争による掠奪人口の統計

年代	移入民	人数	出典
太康六年（285）	夫余	万余人	『晋書・慕容廆載記』「又率衆東伐扶余、扶余王依慮自殺、廆夷其国城、駆万余人而帰」
太安元年（302）	鮮卑宇文部	万余人	『資治通鑑』巻八十四「（廆）大破之（素怒延）、追奔百里、俘斬万計」
永康元年（300）	鮮卑素連部、木津部		『晋書・慕容廆載記』「（廆）率騎討連・津、大敗斬之、二部悉降、徙之棘城、立遼東郡而帰」
太寧三年（325）	鮮卑宇文部	数万余戸	『晋書・慕容廆載記』「廆遣皝距之。以裴嶷為右部都督、率索頭為右翼、命其少子仁自平郭趣柏林為左翼、攻乞得亀、克之、悉虜其衆。乗勝拔其国城、收其資用億計、徙其人数万戸以帰。」
永昌元年（322）	鮮卑段部	千余戸	『資治通鑑』巻九十二「慕容廆遣其世子皝袭段末柸、入令支、掠其居民千餘家而還」
咸和九年（334）	遼東漢族		『晋書・慕容皝載記』「皝自征遼東、克襄平。仁所署居就令劉程以城降、新昌人張衡執県宰以降。於是斬仁所置守宰、分徙遼東大姓於棘城、置和陽、武次、西楽三県而帰。」
咸康年間	後趙	千余戸	『晋書・慕容皝載記』「皝前軍帥慕容評敗季龍将石成等於遼西、斬其将呼延晃・張支、掠千余戸以帰。段遼謀叛、皝誅之。」
咸康六年（340）	後趙	三万戸	『晋書・慕容皝載記』「皝将図石氏、从容謂諸将曰：“石季龍自以安東諸城守防厳重、城之南北必不設備、今若詭路出其不意、冀之北土尽可破也。”于是率騎二万出蠕蠕塞、長駆至于薊城、进渡武遂津、入于高陽、所过焚焼積聚、掠徙幽、冀三万余戸。」
咸康七年（341）	高句麗	五万余口	『晋書・慕容皝載記』「皝掘釗父利墓、載其尸并其母妻珍宝、掠男女五万余口、焚其宮室、毀丸都而帰。」
永和三年（347）	夫余	五万余口	『晋書・慕容皝載記』「遣其世子儁與恪率騎万七千東袭夫余、克之、虜其王及部衆五万余口以還。」
興寧元年（363）	汝南地区漢族	万余戸	『晋書・慕容暐載記』「暐復使慕容評寇許昌・懸瓠・陳城、并陥之、遂略汝南諸郡、徙万余戸于幽冀。」
隆安四年（400）	高句麗	五千余戸	『晋書・慕容盛載記』「盛率衆万伐高句驪、袭其新城・南蘇、皆克之、散其積聚、徙其五千余戸於遼西。」